

交 信 の 学 習

——マイクルバスト「あなたのろう児、より——

「この子は話すことができるようになるだろうか？」子どもがろうだと知ったときに、両親の発するもっとも普通の問いである。あなたも亦、こういう問いを発するかも知れない。多分、確たる「そうだ。」という返事が、こういう質問の最初に、与えられるべきである。ろう児は話すことを学ぶであろう。しかし、ろう児のコトバの自然さと完全さとは、多くの段階がある。ある者は、他よりもたいそう上手に話すことを学ぶ。他の者は、けっして、充分よく話すことを学ばないので、自分らのコトバで未知の人と気楽に話すことができない。

話を学習するに際して、子どもの間に こうした違いがあることにはいろいろな理由がある。ここでこれらの原因について少し考えてみよう。そうすると、ろう児が他人と交信（意志伝達）を学ぶのが如何にむずかしいことであるかがわかるであろう。読話は、話し手に注目することによって、話し手の言うことを理解する能力であって、発語と区別して論ずべきであろう。それにもかかわらず、ろう児がコトバによって自分自身を理解させている時は、交信のわざの一半だけを果しているに過ぎないことを心してほしい。コトバを聴き得るに充分な残存聴力がない限り、完全な交信の行為を行うためには、読話に頼る他しかたがない。交信は、常に二つの方向の過程である。ろう児は「話し手」であると同時に「聴き手」でなければならない。ろう児は、その眼を「聴くこと」に、そうして彼に向かって言われたことを理解するために用いる。

コトバについての関心事

あなたのろう児と正常の聴力を持つ子どもとを比較すると、交信の難易が非常に大きい。2才から3才までの聴児は流れるようなコトバを持っているが、これは幼少の時からろうであった子どもと比較すると驚くべきことである。多分親はこれをくらべてみて心を痛める。たしかに親は皆、ろう児の言語学習について関心を持っている。親は子どものろ

うであること自体よりも、彼のコトバについて—そう関心を持つ。外見上、話すことができないのは、聴くことができないよりもっと目立つことなのである。また、あなたのろう児が話すことができないことは、彼が聴くことができないよりもずっとあなた方を悩ますことになる。

親が子どものコトバについて関心を持つことは望ましい。親は子どもの一番困難とすること、即ち交信を学ぶことに関心を持つべきである。しかし、ろう児が交信を学ぶに当って過度の関心は、他のすべての訓練と同様に、むしろ子どもを助ける代りに遅滞させるであろう。いまわれわれは、数年前可能であると考えられたよりも人生の初期に、コトバを発達させることが予想以上にずっとよくなし得るということを知っている。このことは極端に走り、コトバの発達を強いることが子どもにとってよいことを意味するのではない。子どもがろうである故に、ある意味で親や家庭内の日常の出来事から孤立している。親が子どものコトバに関心を持つことによって、親は子どもと自分らとの間のギャップに橋渡しを試みることになる。しかし、関心を持ち過ぎ、コトバを過度に重複することにより、親と子どもとの間の障壁は、だんだん小さくなる代りに、むしろ大きくなることもある。親は子どものコトバについて子どもを助けることができる。しかし、コトバの発達は、ろう児の身体的、社会的、情緒的成熟と並行するであろう。もし親がろう児を他の諸々の点でよく訓練し、ろう児が自律を持ち安定感があるならば、コトバを強調しても、それは一層うまくゆき有意義となる。もしも反対に、ろう児の訓練が行き届かなくて不安と恐怖とを感じているならば、親がコトバを強調することは、ますますどうにもならなくするであろう。

発語と読語とは早くから強調されなければならない。形式的な訓練をあまり早くから強調するのは、子どもにとって不利を招く。まず彼に広い基礎経験を与えよ。交信が可能なことを理解させよ。もし子どもが欲するならば、身振りによって自分を表現することをゆるせよ。又、普通の意味でのコトバを予期したり、要求したりしないで、彼の発言を理解するように努めよ。普通の子どもでも、コトバを使うずっと以前に、自分を表現するのに、発言と一緒に身振りを使うことを想起せよ。ろう児がこのようにして交信しているのを見たら、激励して彼と共に「彼の言語を話せ」よ。もちろん、親はろう児を激励して、自己表現を援助している間、コトバを使うべきである。異なるところは、彼に親と同様なコトバを要求しないということだけである。これは、はじめ子どもにとって可能でない。

コトバは概念と意味とに基づいている。語は、心像をあらわすシンボルとして使われる。「ボール」という語は、子どもの遊んだ特定の丸い物体を意味する。個人的な接触や経験は、その物体についてすでに持っていたのである。あなたのろう児がその物体や人について多くの経験を持ち、そうして語への要求を持つに至るまでは、コトバの使用を訓練することは無意味である。

能力がそれぞれ異なること

ろう児が相互に異っているということは、親にとって考えにくい。ろうという共通点があるその差を不明瞭にするからである。だから、一人の子どもがよく話せば、すべてろう児はそうのように話し得ると考える。もしも親がほとんど話せない子どもを一人見れば、どのろう児にも話せる子どもはないと考え勝ちである。実際、各児童は1人1人違うと考えられなければならない。多分聴児間よりも、ろう児間の方が個人差がより大きいであろう。ろう児は、その学習能力のようなものにも相異があることに加えて、聴力欠損の度や失聴年齢でも異なる。

ろう児のコトバがひどく違っているという理由の一つは、彼等がその才能においても又気質においても違っているということである。あるろう児はコトバを学ぶことに困難を感じず、他よりも進んで上手にコトバを習得する。それはピアノを習うのと同じようなことであるらしい。ある子ども達は、その資質と才能との良さの故に、それは容易だと考える。彼等はピアノを非常によく演奏するように学習する。これは、子どものごく小群でのことである。大グループの子ども達は、自分達が普通の才能しかないので普通の方法で演奏することを学ぶ。そして他の小グループがあって、他の者は努力し練習しても、普通の子ども或は才能ある子ども同様ピアノを演奏することはできない。彼等は同程度に要求される才能を持たない。経験は次のようなことを教えてくれる。即ち、ろう児というものは幾分同様な仕方、コトバの訓練に応ずる。僅かばかりの例外で、子ども達は皆話すことを学び、ある者は他より以上上手に学ぶ。

ある者は残聴を持っている

コトバの違うもう一つの理由は、ある子どもは用い得る聴力を持っているということによる。もしもあなたの子どもが若干の聴力を持っているならば、彼は残聴を持っているといわれる。残聴というのは残っている聴力のいいであって、その聴力は正常又は平均でな

くても残っている場合である。充分な残聴があると、音が大きくされると聴き得る。そうしてことばの訓練や発達にとって恐ろしく有効である。聴力検査の方法が改良され、補聴器も大いに改良されたので、今では最小度の残聴でさえも利用できるようになった。これは、聴力障害児の教育と訓練における近年の主要進歩の一つである。残聴を如何に利用するかについては、聴能訓練のところで述べる。

聴 力 検 査

多分、ろう児の親は子どもの残聴について医師にたずねる。又、そうでなくても、時にどの位の聴力を持っているかを知りたいと思うであろう。どの位の聴力が残っているかを知って、医師は子どもの聴力の鋭敏さを決める。医師はその子どもの聴き得る最小の音を調べる。これは子どもが5才位以後になってからはじめて完全にできる。しかし、子どもの聴力のある程度の測定は、1才又は時にそれより早くできる。訓練と経験とを積んだ医師は、種々の大きさの音を用いて、そしてそれは *free-field tests* といわれるのであるが、それを用いて残聴をかなりよく評価することができる。このようなテストの基礎に立って、医師はあなたのろう児がどういうふうに学び続けたらよいかということを教示することができる。又、極く幼い子どもの聴力検査の測定は継続中で、多分近いうちに、正確な検査が可能となるであろう。

大体5才になると、聴力測定器を用いての完全な聴力検査ができる。これは種々の音の高さや振動数の音を出すのに使われる装置である。振動数とは一音が1秒時に振動する度数であることは御存知のとおりである。聴力測定器を用いて、聴くコトバや日常の音で最も大切な数個の振動数の音を出してろう児の聴力を検査することができる。これらの種々の振動数の音は純音と呼ばれる。純音を使うことによって、どの音を子どもが聴き、どの音を聴けないかということをもっと正しく知ることができる。例えば、騒音は、高低様々の振動数の合成である。もしろう児の聴力を検査するのにこのような音を用いると、その子の聴力が高いピッチの方でいいのか、低いピッチの音でいいのかどうかを決定することができない。聴力測定器による検査では、一時に一振動しか音を用いず、振動数の合成がない。これが普通純音検査と呼ばれている理由である。

もう一つの聴力測定器の利点は、音を実際になるほど大きくできることである。聴力測定器でできるだけ大きい音を作る時、それは実際用いられる聴力の限界である。このことは次のようなことを意味する。もし聴力測定器でできるだけ大きな音を出しても、ろう

児に聴こえないならば、それは実際的に有効な聴力が残っていないことを意味する。この場合、その子どもは正にろう児とされる。その子がほんの僅かの聴力の残余しか持たないと、この聴力は、実際の役には立ち得ない。たとえ強力な補聴器が試みられても、その子どもは、使用するに価値があるほどは得ることができない。

聴力測定器の検査は、普通 1 秒時 125 から 8000 振動の内の七種の異なった振動数について聴き得る最も微かな音を検出する。子どもが聴くことのできる一番微かな音を見つけることを、その子の境界を決めるという。この目的のために作られたカードに、子どもが丁度聴き得た点が記録される。これらの点は線で結ばれて、この聴力のグラフは聴力図と呼ばれる。

もしもあなたのろう児が聴力を通して若干コトバがわかるならば、注意して構成されたコトバのテストが聴力を検査するため用いられ得る。こういうテストは、その子どもがどんなによく純音を聴き得るかということと比較して、どんなによくコトバを聴いたり、理解するかを示す。こういうテストは、とくにその子どもが補聴器を用いる可能性又は利点を評価するのに助けになる。ある種のコトバの理解は、このようなテストを行う前に発達させられていなければならない。

聴力の集団検出も可能である。これは大きな公立学校で大層有効である。それは、ふるいわけのテストといわれる。その目的は、分らないほどの聴力欠損を持つ子どもを見付けることである。早期にこのような子どもが見出され、医療が加えられるならば、それ以上進む聴力欠損は防がれ、屢々失われた聴力が再び得られるかもしれない。軽い聴力欠損を持っている子どもを同一にし、聴力失調をはばむ（つまり、そうならないようにしようとする）計企は、聴力保存のための計企である。幸なことに、だんだんと、多くの地方や、国や、州の聴力保存の計企が立てられつつある傾向にある。

補聴器の使用

もし補聴器を使用すればうまくいくような充分な聴力をあなたのろう児が持っているならば、話すことの学習は、大変たやすくなるであろう。音を聴くことができるようになることは、よしや、ただ大きい音だけが聴けても、コトバの発達に非常に役に立つ。できれば、いつでも補聴器を使用することは、ろう児が話すことを学ぶ助けとなると知られている最もよい方法である。補聴器が用いられるほど充分な聴力を持たない子ども達もある。そういう子どもには後に問題になるコトバを教えるには、どうしたらよからうか。

補聴器には 2 種類ある。一つは携帯用の型である。これは個人によって携帯されるものである。多分親はそれが現在普通の子どもの大人に用いられているのでこういう補聴器を

見たことがあるであろう。もう一つの型は一般に「机」型といわれているものである。極く最近、それは家庭訓練用型あるいは聴能訓練型といわれている。この器械は携帯するのではなくて、机上に置くのである。この器械は直接話しをする時だけ子どもがつけるイヤフォンを必要とする。この型の補聴器は、とくに残存聴力で聴いたり学んだりするのに用いられる。

2才以前の子どもにどんな種類の補聴器でも使用するのは極く稀なことである。1才から2才までの間では、もしかなりの残聴があるならば、耳の側で話すがい。いろいろやってみた結果、次のようなことを知る。即ち、親は子供の耳のそばで話さなければならないということ、大声で話さなければならない、ということを知る。決して子どもの耳の中へ叫び込んで서는ならない。子どもの耳のところに密接していつも話すことは、子どもに非常に役に立つ。経験によると、携帯用補聴器を用いるのは、主として4才以後に限るようである。更に、もしも子供がまず家庭訓練用型で訓練を受けていたならば、携帯用補聴器を用いることは、子どもにとって非常に容易なわざである。子どもが2才から4才までの間なら、家庭用型（机の上に置く式で、聴くことの練習や残聴を使用するのを習うのに使用されるもの）によりコトバの発達を大いに助長できる。このことは、注意して、又子どもがこのような訓練で悪い態度を身に付けることのないような方法でされなければならない。もしも子どもが学校に入った時、又は後年補聴器の使用に堪えるほどの聴力を持っているならば、補聴器を身に付けるのに態度がよろしいことは、非常に大切なことである。子どもが補聴器を付けることに対する親であるあなたの態度は、子どもの態度をよくするのに大切なことである。ある親は、聴能訓練をすることを非常に過大に考える。効果が上らない時は、すぐ努力を倍加して子どもを長期間訓練するが。こうなると、子どもは損われる。又、親は子どもの進歩について気づかい心配するようになる。このような方法は、子どもを非常にいためることになるかもしれない。2才から4才までの子どもに、厳格な形式的な聴力の「稽古」を予期してはならない。むしろ、やり方は形式的でなく遊戯的にすべきである。期間も極く短く、5分間が望ましく、各期間に一言に注意を集中すべきである。

もしできれば、当初、補聴器や聴能訓練に経験のある人に相談するがよい。ろう児の助けになろうとして親が専門家になる必要はない。実は、ほんとうの父、又は真の母になることがもっと大切なことである。忍耐と愛情と理解の重要さは、補聴器の使用を子どもに教えるに際して、いくら強調しても、強調し過ぎることはない。補聴器の使用は、それが使

われ得る時には、重要なことだが、しかし、あらゆる問題をそれだけで解くというふうに期待してはならない。それは、どこまでも、広い組織的な言語発達計企の一部であって、すべての問題をそれだけで解決できるというようなものではない。

読 話

読話は読唇ともいわれる。読話というのがその本趣に沿っている名前のようなのだ。読話は話し手を見つめることにより話し手の言うところを理解する能力を意味する。特別の注意が話し手の顔や唇の運動に払われるのが、しかし、全話が行われる代りをする顔の表情や身振り、その他多くの「手がかり」も読話者には大切である。

読話は熟達するのに大変困難な技術である。それにもかかわらず、聴力障害児が特別の訓練なくてさえ、読話のある程度覚えるのは驚くべきことである。子ども達は、どんな他の技術を覚えるにも才能にそれぞれ違いがあるように、読話習得の才能にも違いがある。聴力欠損を持つ子どもは皆、大なり、小なり読話をするように学ぶ。ある者は読話が非常に得意で、話し手がいったことを誤解することが滅多にない。又、ある者は読話によって非常にうまく理解するので、聴こえる話し手は「聴き手」が読話のみに頼っていることを気付かないくらいである。

ろう児にとって2才ぐらいから読話によって親を理解しはじめるのが可能である。ろう児は次第に親の唇と顔面運動とが意味を持っていることを知ってくる。もちろん、話す時に、子どもをして注目させなければならない。これは小さい子どもにとってはむずかしいことで、いつもそうさせることは期待できない。子どもは、親が話している時に、親に注目するようにだんだん学ぶ。子どもが見つめている時を利用して、「おいで」とか、「それを頂戴」などの短い句を用いるべきである。たえず繰り返しているうちに、子どもはだんだん親の唇の動きが意味を持っていることを知る。

親は子どもがあたかも正常に聴えているかのように、いつも話しかけてやるべきである。時にはボールのような特定な事物を取って、自由に子どもと遊んでいる間に「ボールを投げなさい。」「大きなボール」などと言いながら、顔に注目させるがよい。ろう児が知っていて、それで経験している事物を用いて、以上のようなことをせよ。

読話を促進するもう一つの方法は、走る、跳ぶ、覗く、落ちるなどのような特別な動作を示す語を用いることである。この動作をはっきり示してから、すぐ注意を顔に向けさせてコトバを言うがよい。次第にろう児は親の真似をして、そのコトバを親がいう時、種々

な動作をすることを覚えるであろう。かなり後になって、恐らく3才か4才ぐらいになって、ろう児は、兄弟姉妹や自分自身の名に反応するようになるであろう。この場合、予想に反するかも知れないが、名前を読話することは、(自分の名を含めて)上に述べたような単純な訓練よりもずっとむずかしい。子どもが長ずるに従って、徐々に語や文の困難さを次第に増して、そうして具体からもっと抽象へと進める。そうして徐々に親は「これは蜜柑です」(具体的)から「私は蜜柑が好きです」(より抽象的な)というように進めるべきである。

大切なことは、ろう児は人の顔が見られなければ読話できないのだということである。このことをよく心しておらなければならない。光線がよく当ることが是非とも必要である。光線はあなたの顔に当るべきで、子どもの眼に直接入ってはならない。側面からの読話は正面からのよりも困難である。もちろん、読話は背後からは絶対不可能である。更に、接近していない人の読話はできない。幼ろう児では、3乃至4フィートが最適の距離だと思われる。

親は読話を学ぼうというろう児を強制してはいけない。指図と奨励とで、子どもが基礎をしっかりとつけるように助けなければならない。子どもは読話をだんだんとよくするように努力するであろう。親は子どもが入学して学ぶであろうずっと進んだ訓練のための基礎をつけてやることができる。更に、親が子どもに与える最も大切なしつけは特別の訓練ではない。学校に上って更に容易に読話できるように進歩させるのに大切なのは、むしろ自信と勇気と挑戦である。もしあなた方親が教師としての教授の役目を十分以上に発揮し過ぎたり、又親としての役目を果たさなかったとしたら、ろう児は、どんな特殊の訓練をどこそうとしなかったよりも、もっとこまったことになったであろう。あなたの一番大きなすべき事、挑戦は、そして機会は、あなたにろう児の親たれということである。このことは子どもの教師であるよりも、もっとむずかしいことであるんだが。

聴力のない子ども

ラリーが2、3才の頃のことだった。両親が彼を耳の病院に連れて行って、残聴の有るか無いかを調べてもらった。彼はよくしつけられていたので、大変よく協同した。多くのテストが行われた。非常に大きな音が耳のそばで立てられた。ラリーは一向反応しなかった。

耳の近くで話しても、補聴器を用いても無効であると親は宣告を受けた。ラリーは文字

通りのろうであったのである。ラリーのような子どもが他にも多勢ある。あなたも子どもさんが残存聴力を持っていないということを知らされた1人であろう。

残聴の量は、できるだけ確かめなければならない。補聴器が無益ならば使う必要はない。不可能を期待することは失敗するのみである。ある親は、補聴器が自分の子どもには無益であると告げられても、それを付けさしたいと我を張る。これは不幸なことである。「聴力が無ければ仕方がない。不可能なことは期待すまい。」というのが望ましい親の態度である。

子どもに聴力がなければ、読話の開始を補助することができる。更に彼自身の声を使うのを励ますことが大切である。失調の他の子どもと同様に、彼も亦、親を呼び、他の方法で自分の声を使うのを覚えるであろう。声を出して物をいうことが奨励されるべきである。3、4才の子どもなら、ゲームのようにして、簡単なコトバを与えて読話させることができる。そうして模倣するように奨励する。そうしてコトバをまねようとする彼の態度はほめてやるべきである。

子どもに音を感じ得ることを知らせるがよい。それには彼の手をとって、それを鼻の上に置いて、「ムームームーム」を発音させる。それから手を親の喉につけさせて、「ブーブーブー」と発音させる。しばらくこれを反覆した後、子どもの手を自分の鼻や咽喉に置いて、真似するように指示する。この練習を楽しい遊戯にしてやってみよ。最初は、結果を重視してはならない。次第に子どもは真似ができ、他の音や簡単な語を使用できるようになる。非常に大切なことは、親は意味のあるやりかたで声を使わし得るということ、子どもに知らせることができるということである。後ではもっと効果的に音を統制できるようになる。

多分親は、こういう練習は子どもにコトバを与えないであろうということに注意すべきである。それは単に始めである。そして、コトバを与えることにはならなくても、学校へ入ってからの言語訓練には有益である。

聴力の無い子どもに話すことを教えるのは更に困難である。聴力を持っていない子どもも、残聴を持っている子ども同様、読話を学ぶことができる。しかしながら、研究面から、次のようなことがいえる。即ち、普通幼少の頃からろうである子どもは、あらゆる交信の面で大そうむずかしい時を持つ。即ちその子は、話し、読み、書くのに非常に困難を感じる。もし子どもが生来ろうの時は、親はこの困難をそのまま現実的に受けとるべきである。親の子どもに対する計企や予想は、それに従って立てられるべきである。親は若

千の聴力を持つ子どもと同様、他の方法で何とかなるであろうということを知るであらう。

聴 能 訓 練

聴能訓練とは、聴える音が理解できるように残存聴力の使用を訓練することを意味する。聴能訓練の必要を考える一つの方法は、今まで音を聴かなかった人が突然に聴こえるようになった時を想像するがよい。普通の聴力を持っている誰にでも至極容易に認められ、又理解される多数の音は、以前にその音を聴いたことのなかった者にとっては、単なる音にすぎないものである。

自動車の「警笛」や、鶏の「コッコ、コッコ」と鳴く声や、牛の「モウ」や、人の「ベチャベチャ」声などを区別することを学ばなければならない。更に、われわれの発音の流れが意味を持ち、それらをコトバと呼ぶことを学ばなければならない。飛行機のうなりと雄鶏の作るときとを区別することは、そうむずかしくない。これらの両者の差は大きくて、この差を認めることは、粗大な聴力識別を作る能力といわれる。もっと後になれば、*He ran to get the sheep* と *He sang her to sleep* との差を認めることは「微細な聴力弁別」を作る能力と呼ばれる。

正常な聴力を持つ赤ん坊は、すぐに粗大な弁別をすることを学ぶ。生後数ヶ月にして、子どもは母の声と犬の鳴き声との違いを知る。生後1年ぐらになると、一時に1語の各音を区別する。約2才で、短い句の音を区別する。例えば「ボールをとりなさい」と「靴を見せなさい」の区別を知る。

ろう児は補聴器ではじめて聴く時、あるいは、親が先ず耳のところに口を当てて話す時、その音の意味がわからない。ろう児は、突然普通の聴力を持っている子どものように、音の違いを弁別しようと学んだり、どんなふうにそれが違っているか、又、その意味をも学ぶことをするであろう。正常の聴力を持つ子どものように、ろう児はまず、非常に違う音の間の違いを学ぶであろう。それから後に、この子は“run”“no”“jump”“ball”などの語の違いを覚えるであろう。そうして最後に、句の中の語を弁別することを学ぶであろう。

聴能訓練は、普通、読話訓練と並行すべきである。ろう児に話し手の唇の運動と顔面表情とを見させることは、その意味の理解に役立つ。このようにして、眼と耳とを共に働かせる。「見ること」と「聴くこと」とを、同時に共働させることは、眼と耳を別個に働か

せる場合よりも、強い印象を得ることになる。

次第にろう児は各音の差を知り、音と意味とを連絡するに至る。子どもが進歩発達するにつれて、ちょうどジョ・アンヌが、ある日自分の先生を咎めたように、親を咎めるかも知れない。先生は聴能訓練の時に、家鴨が鳴く音の代りに「クアック クアック」を用いた。

ある日ジョ・アンヌは補聴器を通して本物の家鴨の声を聴いた。アンヌは本物の家鴨の声が、先生がたてた「クアック クアック」のような声には聴えなかったことに気付いた。アンヌは先生にこのことについて話し、何故か知りたかった。このことは、先生に「クアック クアック」や「モウ」や「ワンワン」は、ほんとうの声ではなくて、ただその代りの模倣であるということを説明しなければならないものだなということを気付かせた。こういうふうに、以上述べた「クアック クアック」などは、単なる置き換えであり記号であるということに注意しなければならない。

聴能訓練でも、他の訓練と同じく、その基礎となり出発点となるものは、その興味と経験であって、その興味と経験とを利用することが最も大切である。子どもは成人ではないのであるから、大人の経験や興味をもって、ことをはじめてはならない。さらに、子どもの経験は、子どもが普通に聴えないので違っている。親は自分らの経験や興味ではなくて、子どもの興味や経験を知り、それによってことをはじめなければならない。

残聴の量が、聴能訓練計企の成功を決定するには大に関係する。もしも子どもの聴力欠損がひどくなれば、理解力や発語力をより良く発展させるばかりでなく、ひどい聴力欠損を持っている子どもよりもより短い時間でそうできる。補聴器を使用する子どもは、すべて最良の結果を得るように聴能訓練を受けなければならない。親は子どもに興味を持たせ、子どもの音の弁別力を増すためには、多くの自然音を用い得る。ドアの音、壺や鍋をたたく音、ベルの音、太鼓の音、手を叩く音、その他の音が利用できる。ある聴能訓練のやり方として、現在、幼ろう児に有効な多くのレコードの用いられる蓄音器式がある。もしもこの装置が、大きくはっきり聴覚の識別を認めるために選ばれれば、非常に役立つ。しかし、聴児のためのレコードは、言語の理解を基礎にしているから、今はじめて聴きはじめる子どもには、結果として大そう困難だということを強調しなければならない。

聴力を失った子ども

多くの子どもは病気が原因で聴力を失っている。もしも子どもが、話すことを習得した

あとで聴力を失ったのなら、普通その子は励ましと助力を与えられればコトバを覚えるであろう。子どもが聴力を失ったあとコトバを用いるように子どもをしつけることはむずかしい。しかし、彼が補聴器の使用に堪えるなら、コトバを聴かせることができるので、まったく別問題である。もしも子どもが残存聴力を持たないなら、話すときにどう感ずるかを知ることによって声を調制することを学ばなければならない。その子どものコトバは、聴力を失う前のようにではなかったであろう。これは聴力が、われわれのコトバを直接コントロールするところのただ一つの感覚であるからなのだ。もしもあなたの子どもが2才以前に聴力を失ったのなら、コトバの訓練の問題は、生来ろうである子どもの訓練と全く同様である。もしも彼が聴力を2才から5才までに失ったのなら、コトバはある程度残っているので、その子どもにとって非常に有利である。子どもが聴力を失う前に聴いたことが長ければ長いほど、自然のコトバを持つことが容易である。

子どもは、その声が聴力を失わせた病気や傷害におかされてコトバを失ったのではない。この子のコトバは、もはや自分自身や他人の話を聴くことができなくなったので変るのである。こういうわけであるから、子どもが聴力を失ったらすぐ話し続けさせることが非常に大切なことなのである。もしもその子が話し続けることをせず、コトバの必要さを感じないなら、コトバを失ったあと、再びコトバを発達させることは非常にむずかしいことである。聴力を失った子どもは他の方法でも救うことができる。これについては他の章で述べる。

交信の問題に打ち勝つこと

交信のむずかしさは、ろう児が直面する非常に大きな問題である。もしもこの子の聴力欠損がひどいならば、交信に相当の困難性を持つことを覚悟しなければならない。補聴器を所持したり用いても、普通の聴力を持つのと同様ではない。読話をする事ができて、コトバを聴くことができるのと同様ではない。聴力が普通でなくて話すことを学ぶのは、遅くて困難な過程であって、完全に普通の話のような具合にはいかない。ひどい聴力欠損を持つ子どもの何人かは、信じられないくらいうまく交信の困難さに打ち勝つ。

普通いろいろなことが講ぜられてもどうにもならない交信の困難さがある。これは、親や教育に当る者が失敗しているというわけではない。いろいろのことが講ぜられた。しかし、親や教育に当る者が非常に多くを期待することはできる。幼時のろうは、とくべつの交信の能力をおかす障害である。完全にそれに打ち勝って聴こえる子どもの特点である楽

な自然の交信の方法をろう児に与えることは、まずむずかしい。

このことは、ろうであるという事実によって課せられるある制限に処していくようにしていくことが必要欠くべからざることであることを意味するものである。聴こえる兄弟姉妹にくらべて、よしその子が普通に交信ができなくても、幸福に首尾よく暮すことを学ぶに助けになる方法は非常にたくさんある。

学校に行くこと

親が子どもと一緒に勉強するとき、子どもが早く学校に上れるようになることを期待する。親は、こうして早くよく訓練された先生の熟練した助力を得たがる。多くの学校は現在幼稚部門を持ち、非常に幼い子どもを受け入れている。あなたのろう児が情緒的に安全に且つうまく訓練されるならば、他の子どもと交ることが早ければ早いほど彼にとっていいことである。もしも子どもを4才乃至それ以上の年令になるまでろう学校に入れることができないなら、聴児のための普通の幼稚園に入れることが好ましい。ある親達はこういう方法をとっている。普通これは3才乃至4才、あるいは3才乃至5才の間にとられる方法である。集団になって他の子ども達と遊ぶことをおぼえることは、ろう児にとって大変いいことである。親も先生もともに子どもの欲求に気を配らなければならないし、聴児と一緒に行動するように指示を与えなければならない。この子が充分大きくなったら、ろう児を教えるように養成されている先生が居る特別の学校(ろう学校)に入学することが好ましい。

ろう児のために2つの種類の学校がある。1つは Day School といわれる。これは聴児の学校と同じようなスケジュールで経営されている学校である。子どもは家庭で生活している。彼はきまった時間に学校に行き、それから家に帰る。それはちょうど普通児の学校と同様である。他の型の学校は、Residential School と呼ばれる。名前が意味するように、この学校では子どもは学校で生活する。子ども達は週末や、定期の休暇に家へ帰る。親はしょっちゅう学校を訪ねることがすすめられる。これらには私立と公立とがそれぞれある。

Day School はろう児に充分な社会生活を与えるようになっている。もしそこに数人の子どものしかいなくて、しかも、年令が皆違っていると、ろう児の訓練に非常に大事なグループ学習は充分行われない。Day School は子ども達が家庭で生活できる利がある。

多くの社会はDay School を持つほど大きくない。こういう社会は、とくに Resident-

-ial School でやっていったらよい。多くの親は、子どもを Residential School に入れたがらない。親は子どもが家から出て行くことを非常に恐れ心配する。これは確にうなづける。しかし、あなたの住んでいる社会に適当な手筈がなければあなたのろう児を家庭に留め置くために、ある種のプログラムを用意することは愚かなことである。いい態度を發展させることにより、又よく訓練することによって、親は子どもを Day School か Residential School かどちらかの学校へ入れる用意を充分ととのえることができる。

もしも学校を選ぶなら、おそらくとるべき最善の方法は、あなたのろう児のために一番適当な学校はどこであろうかとのアドバイスを得ることである。子どもは皆違っているし、違った欲求を持っている。学校はろう児の特別な欲求や能力の基盤に立って選ばれるべきである。又できれば子どもがろうであることがわかったらすぐ学校をたずねることが賢明である。学校の権威者に話して、ろう児の学校の日課を立てるようにすべきである。

もしもあなたのろう児がかなりの残存聴力を持っているなら、特別な学校（ろう学校）で基礎訓練を受けたあとで、聴児のための一般の公立学校の特別学級或は、普通学級に入ることができたらいいのだが、普通これは、発語と読話とがよくできるときにだけいえることであり、又補聴器が使えれば可能なことなのである。

ろう児のためすぐれた公立の Day School や Residential School はたくさんある。あなたのろう児のために一番いい学校のプログラムを立てるためには、親と学校の勉強とが共に協調することが何としても一番大切なことである。